

古典短歌研究について

今年は『源氏物語』が成立して千年という年です。後期の授業で本格的に学習しますが、それに先駆けて、夏期休業中に『源氏物語』に触れてほしいと思います。かと言って五十帖にもわたる長編に独学でチャレンジしてもらおうわけにはいかないでしょう。そこで『源氏物語』に掲載されている短歌を一人につき一首口語訳し、先人の口語訳と比較してもらおうと思います。また、九月の授業時には、担当した短歌の本文を筆ペン or サインペンで「鳥ノ子紙短冊」に、口語訳を「色上質紙短冊」に鉛筆で書いてもらい、文化祭に展示します。（清書用の用紙は九月に配付）

各自の分担は裏面の「二覧（出典は『源氏物語歌合』）」のとおりとします。

自力で口語訳したものと比較する先人の口語訳は以下のものを参考資料として挙げておきます。

岩波日本古典文学大系

小学館日本古典文学全集

新潮日本古典集成

朝日古典全書

角川文庫『源氏物語（玉上琢弥）』

講談社学術文庫『源氏物語（今泉忠義）』

『源氏物語』の口語訳は様々な人が行っていますが、かなりデフォルメされているものもあります。何もせずに丸写しすることは絶対にしていただき。逆に自力で口語訳して終了とせず、できるだけ先人の口語訳と照合してください。幾つかの先人の口語訳を比較するのも意義のあることだと思います。

担当の短歌（原文） 裏面の「二覧」から書き写す

その口語訳

先人の口語訳（参考資料名）

『源氏物語歌合』は『源氏物語』に登場する三十六人の秀歌を各三首を選抜し、結番したもので、『五十四番歌合』とも呼ばれている。撰者は未詳、成立時期も不明であるが『風葉和歌集』撰進（一二七一年）の前後の頃と考えられている。

伝本は甲乙丙の三系統に大別され、それぞれ若干の内容の變化が認められる。この展示は甲本をもとに、丙本にみえる雲居雁・末摘花の二名計六首、更に一条御息所・小野尼君の二名計六首を加えて、四十人六十番の歌合とした。

作者

【左】

桐壺帝
朱雀院
冷泉院
光源氏（六条院）
藤壺宮（薄雲女院）
螢兵部卿宮
宇治八宮
匂宮
女三宮
紫上
総角大君
中君
花散里
内大臣（致仕太政大臣）
夕霧
髭黒
空蟬
明石尼君
雲居雁
一条御息所

【右】

槿齋院
大宮
明石中宮
六条御息所
秋好中宮
玉鬘
落葉宮
朧月夜尚侍
浮舟（手習君）
薫大将
柏木
夕顔
源典侍
北山尼君
明石君
紅梅
明石入道
弁尼君
末摘花
小野尼君

古典短歌の文化祭展示にむけて

夏期休業中の課題であった『源氏物語』の短歌の清書を次の手順で行います。注意事項も併記してありますから、熟読の後、集中して取り組み、時間内に終了させてください。

①「色上質紙短冊」には「口語訳」を鉛筆で、「鳥ノ子紙短冊」には短歌の原文を書く。破いたり書き損じたりしないように充分配慮してください。余分はありません。

②短冊を勝手に取り替えない

「色上質紙短冊」は、クラスごとに色が異なります。「鳥ノ子紙短冊」は図柄に好みがあるかと思いますが、**展示を意識して配付している**ことを御理解ください。

③各自の分担の短歌の原文を確認する。

念のため、プリントの裏面に分担を掲載しておきました。参考にしてください。

④短歌の原文は「鳥ノ子紙短冊」に筆ペンを使用して書く。

各列に同じフェルトタイプのもを渡します。順次記入したら、次の人に筆ペンを回してください。

フェルトタイプではない、毛筆タイプの筆ペンで書きたい人は教卓まで取りに来てください。

⑤「鳥ノ子紙短冊」には上下があるので、**配付された向きのまま**で書く。もしわからなくなったら…

短冊を三等分するつもりで、両手で短冊を挟み持ってみて、手で挟み持っている箇所に図柄がある（図柄が多くある）方が上になります。↓【図1】を参照。

【図1】



36センチの短冊を横長に置いてみました。左右のどちらが、上になるでしょうか？

← 上から順に

桃色の砂子

緑色の斜線

金粉の霞柄

← の三種の短冊を並べました。間に定規を挟んで12センチごとに黒糸を渡してみました。

← 左側の黒糸の周辺に色や柄が来ているのに対し、右側の黒糸の周辺は何もなく、白紙です。

← 左側を上にして使用することになります。

⑥書く際は、上句と下句の二行に分ち書きにする。

短歌は「五・七・五・七・七」の定型詩です。むやみやたらな箇所で切ってしまうと視覚的にも内容的にも解りづらくなります。

臨書（＝毛筆の原文を転写すること）ではないので、一行目（上句＝五・七・五）と二行目（下句＝七・七）に段差をつけて書いてください。↓【図2】を参照。

【図2】

かぎりとして わかる道の かなしきに
いかまほしきは 命なりけり

⑦できあがったら、両方とも裏面右上に出席番号を鉛筆書きする。（クラス・氏名は不要）

提出（回収）は、「色上質紙短冊」と「鳥ノ子紙短冊」の両方を同時に、出席番号順に集めます。向かって右に「色上質紙短冊」、左に「鳥ノ子紙短冊」を置くように、黒板側が上になるように、裏返しにして出してください。

「近現代短歌のグループ発表」



文化祭の展示は、同一科目を担当した教諭と共同で行った。
(下の古典短歌についても同様だが、担当によって扱った古典短歌の出典は異なる)

「古典短歌研究（源氏物語歌合）」 写真は1クラス分のみ



原文を筆ペンで書いた鳥の子紙短冊の左隣に口語訳を書いた色上質紙短冊（このクラスごとに色が異なる：このクラスは薄紫色）を配置した。